

## 嵐

神野麻郎

漁協の二階の事務所に入ってきた朋ちゃんが、用をすませると私のそばに来て笑いながら、でも探る目つきで、

「別荘にあの人が来とるよ」とささやいた。朋ちゃんの住む隣の集落の波止場で、さつきその人が海を眺めていたのを見かけたというのだ。

「痩せた人でグレーの長髪に眼鏡だったし、まちがいないよ」

とつさに「ほうなん？」としか返せなかったが、何でもないと無表情をつくるおうとすると何やら息がつかえた。でもすぐ、それならあの人は何で電話かメールで知らせてくれなかったのだらうと思った。

以前のお茶飲み話に、別荘の住人のことが話題になったとき、あの人のことを感じがいと私がちよつとほめたのを朋ちゃんは憶えていて、そんなふうに私をからかう調子が出るのだ。あんなことは言わなければよかった。

でもそれからは、仕事が手につかないというほどではないが、四時に事務を終えるまで、ずつとあの人——吉川さんのことが気にかかっていた。吉川さんが来るのは三月以来だから、三カ月も音沙汰がなかったことになる。別荘だから、長期の不在はあたりまえのことではあるけれど。

港の事務所からまだ強い日射しに目を細めながら自転車で帰宅すると、誰もいない。父はまだ港にいて、和樹は今日もクラブ活動で遅くなるのだろう。そそくさと三人分の夕食の下準備をしておき、着替えをしてから車庫の軽自動車を動かす。海に落ちこむ山の斜面の中腹につけられた、狭い県道を走る。夏至が過ぎて間もないところで、この時刻ならまだ海も空も昼と同じように明るい。

訪ねる前にまず電話でことわってもよいわけだが、いやその方が管理人としての手順なのだろうが、それだと電話だけですんでしまう可能性もある。来ているなら、久しぶりなのだから吉川さんの顔を見たい。私は三月の別れ際のことにはやはりこだわっている。

木陰で陰気な感じのする門前のスペースに、吉川さんのシルバーのセダンが止まっている。門の内側から犬に吠えられる。その無邪気なボーダーコーリ種のスフィアは、私だとわかるとこんどは甘えるような声を出した。門扉越しに、海に向かう広い庭の藤棚の下のベンチに奥さんが幅広の帽子を目深にかぶって腰掛けているのが見えた。私の中ですこし落胆がある。どこかで吉川さんは一人だと思おうとしていた。夫妻でいっしょに来るのは、

このごろではめずらしい。挨拶すると、会釈は返してくれたが困ったようにすぐに立ち上がって家の中の夫を呼び、自身は家の中に消えた。また調子がよくないのかもしれない。吉川氏が出てきて門扉を開けてくれ、

「やあ、いろいろお世話になっていきます」となつかしい笑顔で挨拶する。そのまま南側のテラスのベンチのほうに招かれた。

「今度は四日間だけいるつもりです。妻の調子があまりよくないものだから、気分を変えようと思って来ました。もう少し長くいたいんだけど、火曜日には講義があるから」

別荘の前の持主がイタリアから取り寄せたという、背もたれにしゃれた装飾のある鉄製の白いベンチに並んで掛けて、吉川さんは屈託なさそうにしゃべる。私は手にしたダブルツト端末で管理用のページを開き、家の中の奥さんのことも意識してむしろ事務的に、留守の間のこまごましたことを伝える。言われていたようにプロパンガスを交換したこと、いついつ庭と外構の掃除をしたこと……。

吉川さんは一々うなずいて聞いている。春よりは少し頬がくぼんでやつれたように見えるが、気のせいだろうか。この人はもう年寄りのように、三月のあれほどのことなど、もうすっかり忘れているのかもしれない。

集落の段々畑に菜の花がにっ、海からも春風がわたつてきていた。明日大阪に帰るという日、別荘の書斎兼居間でお茶をいただきながら私はめずらしく長居した。その時の吉川さんは本の執筆とかで一人で十日間もこもっていたのだが、その仕事も一段落したようだった。落ち着いたクラシックが低く流れる部屋のソファーに掛けて、話はいつものように本や外国旅行のことなどから始まったが、その時は私の大阪時代のことを訊ねられたのをきっかけに、つい自分の結婚や離婚のことも口にした。中年のおばさんのありがちな身の上話だとしても、それを吉川さんに聞いてもらえるのが嬉しかった。でも、離婚前後の話になると、さすがに当時のつらさがよみがえってきて私は涙もこぼしてしまった。

ふと気づくと窓のガラス越しに見える海の雲は夕焼け、その照り映えが庭の空気も染めていた。電気も点けていなかったの、世の中から隔たった秘密の暗がり二人だけでたずんでいるようなぐあいだった。音楽も止んでいた。会話が途切れた時、吉川さんが、私の話をまるごと呑みこむように深いため息をついた。すると私は、自分の息の乱れが意識されてあわてた。急いで立ち上がり、辞去しようとした。長居をわびる言葉がぎこちなかった。玄関で吉川さんがふと私の手を取り、自分の両手に包みこんだ。そしてその手をゆっくり私の背中にまわした。

立ったまま抱かれていたのはほんの数秒で、そしてそれだけのことだった。私が感情をさらけ出して涙ぐんだりしたので、吉川さんは親のような、あるいは親友のような親しさで私を慰めようとしてくれただけのことだったのかもしれない。でもあの時、私は吉川さんのふるまいよりも自分の中にうごめいたものにたじろぎ、あわてたのだ。心と肉と

の接点のようなどころで突きあがり、うごめいたもの。私はあの時、固くなってずいぶん思いつめた醜い顔をしていたのではないだろうか。

吉川さんからはすぐその夜、わびのような、そうでもないような短いメールが届いた。私は何も返せなかった。でも私は吉川さんを嫌悪したのではない。ただ、思いがけず自分の中に起こったざわめきをしばらく整理しかねた。そしてまさかあれは、恋などという感情であるはずがないと否定した。

雑談になって地区の近況などを伝えたりしているうちに、家の中から声がして、足元でじやれていたソフィアが急いで飛んでいった。奥さんは続けて吉川さんの名も、さん付けで呼んだ。私は立ち上がり、辞去しようとして、少し迷いながら、

「あの、お借りした本、まだ途中なんですよ。でもとてもおもしろいです」と言ってみた。

「ああ、源氏でしたね。ほう。どこまで進みましたか？」

「玉鬘たまかすらが髭黒大将ひげくろと結婚したあたりまでです」

「玉鬘十帖の終わりまでいったんですね。そりやあ早い。たしかこの間は濔標みおつくしのあたりだったでしょう。源氏を巻頭から玉鬘十帖あたりまで通読する人は、ぼくの学生にはもちろん、世の中にもそんなにいませんよ」

ほめられた気がして、悪くない。

「でも、ご本、お仕事に使われるのでしたら、すぐにお返ししますが」

「いや、いいんです、あれは。ゆっくり読んでください。いつかまた、あなたの感想も聞きたいね。……お茶でもさし上げたいんだけど、着いたばかりでばたばたしています」

「いえ、これで失礼します。よいご滞在を。何かご用がございましたら、いつでもメールかお電話くださいね」

奥さんとはとうとう話ができなかった。

冴子と海のそばのレストランでしゃべる。国道沿いにあるハンバーグ料理店で、シックな色のウッドデーなつくりも制服の従業員もこのあたりにはおしゃれで、わりとはやっている。味もまあまあだ。月に二、三回、冴子とそれぞれの車で山越えして北隣の市の大きなスーパーに買出しにくるとき、たいてい途中でここに立ち寄って久しぶりの外食を楽しむ。

「ゆうべ武雄と喧嘩したんよ。ひどいんよ、あたしに隠れてまたパチンコやつとってね。ほんで、小遣い全部はたいて、足りんと家の……」

冴子の話はおおかたが姑か夫の悪口、それでなければ三人いる子供たちの愚痴だ。でもそうやってしょっちゅう口喧嘩もしながら、結局家族は仲がよいのだ。冴子の屈託ない笑い声や健康そうな太り肉がそれを語っている。近年は漁師も日曜は休みで、一家はよくにぎやかにワゴン車に乗りこんで遊びに出かける。時には海峡の橋を渡って神戸や大阪まで

足を伸ばす。冴子を見ると、私も高校卒業後都会になど出ずにとここに居たのだつたら、近隣で適当な伴侶を見つけて冴子のように屈託なく暮していたかもしれないと思う。

同級生の冴子とはもの心ついたときからずつとの付き合いだから、何でもしゃべりあう。ただ、冴子からあけすけに夫との性の不満などを聞かされるのは閉口するが、まあ適当に聞き流しておけばよい。誰かにしゃべることですトレスを解消するわけだ。

「佳那、再婚はせえへんの？ 何で？」

会話がふと途切れたときに、冴子がたまにしてくる質問だ。またか、とこれにも閉口するが、

「わからん。ええ人おつたらな」といつものように答える。

「やっぱり、徹平くんはあかんの？ こないだもな、ウチに、佳那とのこと取り持ってほしいようにゆうとつたけどなあ」

徹平くんはこの市内で運送業を自営している独り者で、私の遠縁にもあたる。私たちより三つも年下だが、私が集落に帰って以来、それとなく好意を示してくる。まじめそうで感じも悪くないが、こちらにはもう年ごろの息子もいるわけだし、それにまだ私は思い切り悪く、離婚の後遺症を引きずっている。

「あんた、女盛りやのに、もったいないなあ。何でこんな田舎に戻もってきてしもたん？ ほらまあ、あんたの気持ちもわからんでもないし、戻もってきてくれてウチも嬉しいけんど。高ちゃんが元気でおつたら、あんたの人生もだいぶちごたやろになあ」

私の兄の高志は、地元の水産高校を卒業してから外国航路の貨物船に乗り組んでいたが、作業中に事故で亡くなった。六年前のことだ。快活で頼りがいのあった兄を不意に失って、そのために家族皆がよほどつらくなって、私が自分の家族よりも実家のほうに気を向けたこと、それが離婚の一因になったかもわからない。

「あんた、やっぱり再婚、まじめに考えな。和ちゃんのためにもな。ほなけんどまあ、こんな田舎におつても、ほらあかんわ。出会いや、まったくくないもん。また大阪にでも出て、ちよつと仕事でもしたらええんじやわ。佳那やつたら、すぐええ人見つかると思うわ。あんた、よう見たら、今でも美人やもん。齢より若う見えるし」

ほめているのかけなしているのか、私は苦笑するしかない。ほなほの間、だんだん衰えていく祖父や生意気盛りの息子の世話は誰がするん？ ほれにこんな子持ちのおばさん、どこへ行てもまともに相手にされるわけないやろ。自分で言い出した冗談口に、冴子自身も声をたてて笑っている。おたがいに、ふだん閉じ込められている狭い地区を離れてきて、冗談交じりに気楽にしゃべる、こんな息抜きが必要なだとわかっている。冴子も私も、集落ではそれなりに仕事や家のことに追われているし、誰でもよく知り合っている孤島のような集落では人目陰口もなかなかきびしいのだ。

「ええ人おったら」という冴子の言葉で、私はつい吉川さんを連想してしまった。今自分の中で気になる人といったら、しいていえばあの人しかない。でも、まさか、この好もしく思う気持ちは恋心みたいなややこしいものとはちがう、とやっぱり思う。吉川さんはもうあんな年なんだし、奥さんがいるわけだし。私はたぶん女子学生の一人に戻ったような気分で、知的な初老の大学教授に漠然とあこがれているだけだ。

その吉川さん夫妻を、偶然市内のスーパールで見かけた。たしか明日はもう帰るはずだが、気分転換もかねて食料の買出しに来たようだ。奥さんはやはり目深に帽子をかぶり、表情が冴えなかった。吉川さんがそれとなく気遣い、見守っている。奥さんは神経的な病気で、入院したこともあるらしい。二年前別荘を買ったのも奥さんの療養が一つの理由だと聞いた。でも二年の間に二人でいっしょに来たのは数えるほどで、たいていは吉川さん一人がソフィアと仕事で使う本を車に積んでやって来た。

広い店内だが、顔が合ったので挨拶した。「やあ」と吉川さんはおうように答えて微笑んだ。後で冴子に誰かと訊かれたので教えると、

「ああ、あの人がそうなん。いつか朋ちゃん、あんたが好きなんじゃとゆうとったわ。あんたも、じつは隅におけへんのじゃなあ」とまたからかう。口の軽い朋ちゃんにちよつと腹が立つ。根も葉もないことを誰にでも言いふらしているのだ。

「好きやなんて。本を貸してくれたらして、親切な先生というだけよ」

あれこれ無駄口をたたきながら冴子と買い物をした後、いっしょに車で国道を戻って終わりに地区の町に一つだけある銀行に寄る。通帳を繰ると、今月分の漁協の事務の給料や日本語教育サロンのアルバイト料のほかに、前夫から養育費の仕送りも振り込まれていた。その冷たい感じの活字の名前と心もとない金額をながめると、いつも不安がきざす。それでも離婚した相手は、家裁の調停で決まった養育費だけは毎月きちんと送ってきてくれている。

吉川さん夫妻はやっぱり翌日大阪に帰った。帰ります、あとはまたよろしくお願いします、という短いメールだけが送られてきた。今度はゆっくり話す機会もなかった。

雨が激しい。漁協の二階の窓から見える港や湾は白くけぶり、出入りする漁船も力なくかすんでいる。

今年は空梅雨かと思っていたのに、七月中旬のこのころになってよく降る。魚がおらん、貝が獲れんと、二階の事務所に上がってくる漁師が口々にいうのを聞く。たしかにこの時期によく釣れるはずのイサギも、タイやアジも水揚げが少ない。海士がウエットスーツを着て素潜りで獲るアワビは、口開けた春の間こそまずまずの水揚げだったが、その後はしだいに収量が減って、トラックでやって来る大阪や神戸の買い付け業者からも不平を言われている。天候不順、気候変動は漁にも影響が大きい。

組合長を長く勤めている父も含めて、漁師たちの近年の恐れは磯焼けだ。浅海では海藻が育たず、だから魚貝も寄らない、育たないという。原因はよくわからないが、地球規模の温暖化で生態系が変化し、磯が焼けてしまったのだらうと皆は言っている。今でも私は、一夏に二、三回は子供のころのように近所の海に潜るのを楽しむ。浅い所でサザエを数個拾うくらいだが、子供のころは海藻が豊かにゆらめいていた記憶のある岩場が、禿山のようには海中に露出して、それが視野の限りに続いているのを見てぞっとすることがある。以前に沖縄の海で見た色鮮やかな魚や気味悪いヒトデがふえたような気がする。それに、海に浸かってみると、たしかに昔とは水温がちがっていることがよくわかる。

横なぐりの雨に半身を濡らしながら帰宅する。夕食の準備ができるころ、和樹も父もやはり濡れながら自転車で帰ってきた。食べ盛りで反抗期の和樹は、椅子に掛けるなりものも言わずに出されたものをかきこむ。手足が伸びて、背丈はもう私を追い越してしまった。

後片付けやたまっている洗濯をすませたら八時過ぎ。少し休んでから軽くお化粧を直して自室のパソコンの前に坐り、にわか先生の顔をつくろう。チャットで中国にいる中国人に日本語を教えるのだ。

今日の一時間目の生徒は四川省成都市の若い女性、江蘇省連雲港市の中年の男性、それに内モンゴルフフホト市の大学生だ。ディスプレイに私も含めて四人の顔がライブで小さく映っている。中級の授業だから、挨拶や自己紹介はまずスムーズに進んだ。これもディスプレイに映っているテキストの今日のテーマは「コンビニでの買い物」。テキストの行文についていちおうの説明をした後、フリートークに移った。まず、

「みなさんの町にコンビニはありますか？ 日本にあるコンビニの会社の名前を知っていますか？」と質問を投げかける。大手の会社の名前がすぐ挙がってきた。逆にそれぞれの人からコンビニについての質問が、ややたどたどしい日本語で届く。

「日本ではコンビニの品物は安いですか？」

「先生はよく利用しますか？」といったたぐいだ。

答えているうちに五十分はすぐ過ぎた。

もう慣れてしまったが、ときにふと我に返ると、日本の四国の片田舎の古いわが家に居ながらにしてこうして遠い外国につながり、それも自分の仕事にしている感覚はやはりなかなか不思議なものだ。わが家からほんの三分も歩けば漁港で、網小屋が立ち並び船がもやい、その小さな湾の向こうは一面の太平洋なのだ。集落にはコンビニなどもちろんない。両側から山が寄せ谷筋から河口にかけてのわずかな平地に百数十の漁家や農家が並んでいるだけの集落で、老人も多いので夜は早々とひっそりする。その夜に、はるかな国の人たちと、つかの間、顔を見合い、日本語で会話をかわすのだ。

大陸にいてこのネット上の日本語教育サロンを立ち上げた、やり手らしい女性、劉オーナーとも、チャットやメールでやりとりしているだけで直接会ったことはない。まだ大阪

にいる時に友だちの伝手で始めたアルバイトで、初めはネット上に存在するだけの日本語教育サロンなど長くは続くまいと思っていたのだが、劉さんの手腕がすぐれているのか時流に合っているのかまず順調で、もう四年目になる。こうして世界の一部にふれているという感覚のほかにも、授業のためには多少の学習も必要だから、新聞も読むしネットも見るので、わずかでも自分が先に進んでいる感じが得られるのがいい。それに現実的にも、たとえ週に二回程度でもこのアルバイトは欠かせない副収入になっているのだ。

二時間目は大連市の近くと湖南省常德市に住む二人の初級学習者に、数の数え方や日時を教える。学生時代、半年間天津に留学していたこともあって中国語は多少わかるが、授業はすべて日本語で行うという劉オーナーの方針なので、わかりやすい日本語だけである。いろいろな日本語を説明するのは多少骨が折れる。

さつき居間でテレビを見ていた父は、もう自室に引き取ったらしい。明日は早朝に建網を引き揚げに行くと言っていたので、私も早起きして朝食を準備しないといけない。六年前に長男を異国で亡くしても、その三年後に母が病没しても、気丈にかまえ気を張って組合の仕事や漁を続けてきた父だが、近ごろは頭も体の動きにも鈍さが目立つようになってきた。荒い海の仕事をいつまで続けさせられるかと思う。

和樹の部屋からはまだ灯りが漏れている。夕食後はほとんどこもったままだから、スマートフォンでチャットかゲームにふけているのかもしれない。顔を合わせると、「ゲームばかりしていると頭がバカになるよ。少しは本を読みなさい」といかにも母親らしいセリフを吐き、きまって反発をくらっている。ただ、このごろは和樹が海と山しかないこの田舎暮らしにもすっかり慣れ、気の合う遊び仲間もでき、大阪時代は静かでひ弱な感じだったのが生き生きとたくましくなってきたのは嬉しい。

遅くシャワーを浴びて身じまいをした後、久しぶりに書棚から吉川さんから借りている源氏物語を取り出してみる。白い表紙のハードカバーで目方も重いものだ。開いてみるが、といつても原文はほぼわからないから見るのはほどほどにして、主にページの下部の現代語訳を読み、頭注も拾い読みする。

本を開くと、吉川さんとの時々楽しかった会話が思い出される。二年前新しい借主の吉川さん夫妻が初めて来たとき、私は町から委託された管理人としていろいろ世話をしたのだが、トラック一台で来た荷物の中に本を詰めた段ボールが多いのに驚いた。それはまもなく、二人にお茶をよばれたとき、吉川氏が大学の先生だということがわかってなるほどと腑に落ちた。

次に訪ねたときには、段ボールの本は改装して作り付けた真新しい書棚にだいぶ並んでいた。洋書が多かったが、日本の文学や文化に関するものもあった。ソファアに坐ってお茶をいただきながらの話に、

「まあ東西の文学の比較のようなことを、ぼつぼつやってるんですよ。あってもなくても

いいような仕事ですが。そう、このごろは特に日本の古典を読み漁っています」と吉川さんが説明してくれた。すると白髪交じりのこの人の頭の中には、いろいろな外国の言葉と日本の文学作品の両方がつまっているらしい。

「本の虫なんですよ、この人は。私よりも本のほうがよっぽど大事なんです」と、その時は明るくふるまって聡明そうに見えた奥さんが口をはさんだ。

「この人は若い時代にね、貧乏なくせに本の出費だけは惜しまなかったんですよ。友だちから借金してでも本を買ってたんです。私、やめてくださいって何度も頼んだんですよ。それでもまったく耳を貸さなかったんです」

「ぼくはまた、この人はああ言ってるけど、冗談で言ってるのにちがいないって、長い間、信じこんでいたんです。だって、不幸にも学者なんかといっしょになったんだから、本に埋もれるくらいの覚悟はできてるはずだと。でもこちらはまったく冗談なんかではなく、真剣に本の買いすぎをやめさせたかったらしい」

「そうですね、そうですね」と言って二人は顔を見合わせて愉快そうに笑った。仲のいい夫婦なのだと思った。そして奥さんが少しうらやましくなった。知的でやさしい夫に寄り添っていられるし、こんな別荘をもてるくらい経済的な余裕もある。

その時は会話の流れで私も、

「大学は日本文学科を出ました、勉強はあまりしなかったんですが」とおぼろげと告白するはめになった。吉川さんは、片田舎の別荘管理のおばさんが文学など学んだというのを珍しく思ったのか、

「ほう、そうですね。主にどんな勉強を？」と訊いた。

「ええ、ゼミは日本語教育のゼミでした。外国人に日本語を教えることに興味があったもので。外国にも行ってみたかったです。古典文学の授業も少しとったんですが、何も憶えていません」

吉川さんは眼鏡の奥で目をいっそうやわらわらげて笑った。私が何度も書棚を眺めるので、「本、興味があったら、お貸ししますよ。ここに持ってきている本は、あまりふだんは使わないものばかりですから」

「ええ、それがいいわ。たくさん持って行ってください」と奥さんも冗談めかしながら勧めてくれた。

私は喜んで、その時は欲張って三冊ばかり日本文化についての評論を借りたのだった。チャットクの授業に少しは役立つかもしれないと思った。隣の市の市立図書館までは車で山越えして片道半時間以上もかかるし、返しに行くのも面倒で、足が遠のいていた。

それからは、吉川さんが別荘に来るたびに、少しづつ外国や日本文化の話をした。もちろん、たいていは私が質問をして、吉川さんが答えてくれるのだった。さすがに年季の入った学者で、何についても私が理解できるようにレベルで丁寧に教えてくれた。

書棚の本も、薦められるままに何度か借りた。私が源氏物語を読むなどという無謀なことを始めたのも、

「何といっても、原典を読むのがいいですよ。原典こそおもしろい。評論などは時々の方が書いた、いわばその人たちの勝手な解釈にすぎないから、二の次、三の次でいいんです」と吉川さんが断言したからだ。

源氏物語は、現実にはありえないスーパーヒーローの身勝手な女遍歴の話、不倫だらけのけしからぬ物語、といった先入観で読みはじめたが、実際に読んでみると印象はだいぶちがってきた。美しい季節めぐりやはやかな年中行事を背景として、男女の交情が実に上手に描かれていると思った。特に恋愛心理の微妙なひだまで手に取るように書かれているのに感心した。なるほどこういう状況でこんなことがあったらこの人はこう感じるだろう、こうするだろうと、娘時代よりも、一人前に結婚と離婚を経験したわが身だからこそよくわかる気がした。時代社会も境遇もまったくちがうにしても、そんなことを越えて変わらない人のほんとうの女や男の心というものがこの本には書かれているのかもしれないとさえ思われた。

今はだいぶ進んで第三十一帖、真木柱の巻の途中。髭黒大将がライバルたちを出し抜いて玉鬘を得るといふ宿願を遂げ、得意になっている。源氏に引き取られて養育された玉鬘は妙齢の美女、無風流で直情径行の髭黒は天にも昇る気持ちで、もう家をかえりみない。もともと病気がちだった髭黒の北の方は錯乱、うまいこと言いつくろって玉鬘のもとに出かけようとしていた夫に香炉の灰をぶっかける。髭黒の頭も着物も灰だらけ。これも北の方に取りついている物の怪のせいだったとか……。 「物の怪」とは、今ふうというなら、誰の心にも巢食っている心の鬼のことかもしれない。離婚のごたごたの際には、たしかに私の中でも心の鬼が荒れ狂った。だから私には北の方とその子供たちが気の毒でいたいたしい、髭黒の身勝手が許せない。私の前夫も、結局ほかの女に走ってしまったわけだから。

でも、二十分も文字を追っていると瞼が重くなってきた。雨は弱まったようだがまだ降り続けている。山からイノシシでも降りてきたのか、どこかの犬がさかんに吠えたりしている。

学校が夏休みになると、東隣の集落近くの高台に散在する六軒の別荘には、それぞれの持主の家族や連れが次々にやってきて一年中でいちばんにぎわう。持主は県庁のある街の開業医だったり、大阪の会社社長や神戸の裕福そうな会社員だったり、彼らとその家族やいっしょに来た仲間は、一年でいちばん暑い時期を、大洋に面した見晴らしのよい別荘でくつろぐ。また近くの浜で泳いだり、港で釣りをしたり、漁協が経営する食堂で海鮮料理を味わったりしてすごす。このあたりの海水は黒潮の分流がそのまま寄せてくるので水は透明度が高く、都会からの客たちは新鮮な魚介とともにそれを喜ぶ。港に係留してある所

有のモーターボートで遊びに出たり、漁船をチャーターして釣りに出る人たちもいる。夜は星空や月夜を満喫し、海に向けて花火を打ち上げる。

町から別荘の管理を委されている私も、この時期が一年中で一番忙しい。日常的な庭や外回りの清掃は近い集落に住むおばさんたちが引き受けてくれるのでよいが、私は二日に一度巡回する上に臨時の用も引き受けている。施設や電気系統の不具合、プロパングスの交換、クリーニングやゴミ処理、買い物相談などなど、オーナーたちは昼夜を問わず私の携帯をよく鳴らしてくれる。必要な連絡先はいちおうチラシにして配布してあるのだが。庭に蛇が出た、どうにかして、という類の電話も毎年のようにある。別荘は高台、というよりまったく山の中にあるのだから、青大将もマムシも出るしサルもイノシシも出る。そんなことは買う前からわかっていそうなことだが、都会の人々には一々が大事件らしい。

もともと町おこしのため、十五年ほど前に町と業者が共同で開発して売り出した別荘群で、その管理は初めの開発の事情もあって町役場が担当している。それが、前の管理人の老人が高齢で辞めたので、役場から私の父に打診があつて、二年前からは私がするようになった。私としても家計の一助になるのでありがたかった。

別荘の人々からの電話は漁協で事務をとっている間にも遠慮なく鳴るので、専務らに「ああ、佳那ちゃん、今年も人気じゃなあ」と冷やかされる。用は電話で済むことが多いが、車を走らせなければいけないこともある。週四日の勤務や毎日の休まない家事、それにネットの授業のうえにそうした対応が加わるわけで、日に何度も汗をかきながら、日々がめまぐるしく過ぎてゆく。寝床につくころにはもうくたくたで、源氏物語の世界にひたるどころではない。

やがて吉川さんたちもやって来た。大学も夏休みに入ったようだ。でも奥さんとでなく、男の人二人といっしょだった。それとソフィアと。

今度は着くなり電話をくれて、その時は「研究仲間と勉強の合宿をするんです」と言っていた。それでも暑い昼間はのんびりすごしているようで、年恰好のちがう三人がゆつくり港の波止で釣りをしたり、食堂で飲み食いしている姿が見かけられた。ソフィアも時々連れ出してもらっていた。港で出会った時に聞くと、車で県南のあちこちの砂浜を回って海水浴もしてくるようだった。その時は三人とも五日間ほど帰った。

別荘のにぎわいはお盆過ぎまで続いたが、吉川さんはその後は姿を見せなかった。去年の夏のようにまた外国に出かけたのかもしれない。

この夏の天候不順は八月に入っても続いて、雨が多く、八月の二十日過ぎには低気圧が停滞して県南には黒雲が垂れこめ、豪雨が三日間も降り続いた。テレビは雨量を「記録的」という言葉を使って報じた。北隣の市の北部では川があふれて民家や学校がだいぶ浸水したという。通行規制が敷かれた幹道もあった。

空がやや明るみ、雨がやや小降りになってから、私は別荘を見回りに行った。崖沿いの道はふだんのようにすとはちがって、濡れた小枝や崩れ落ちた小石が散乱していた。小流れをあふれた水が路面を小川のように流れ落ちている所や、早くも人夫が入って道路を補修している所もあった。海に面した山が三日の間に含んだ大量の雨水をもちきれず、全身を振るって吐き出しているぐあいだった。

今やたいてい留守になった別荘をすべて見回ったが、幸いどこも木の枝が多少落ちて庭が荒れているくらいで事もなかった。

しかし帰り道、異様な光景を見た。途中に弘法大師の修行址というお堂があつて隠れた名所の一つになっている所の、参道のそばの崖が崩落していた。ふだんは時々参拝者の車の駐まっている舗装スペースの海側が、かなりの幅で削ぎ落ちていた。車を降りて恐る恐る、見晴らしの変によくなった崖のへりまで歩くと、数十メートル下の海岸に青々と茂ったままの生木がいくつかひっくり返り、新しい色の土や大石が積み重なっているのが見えた。そこに灰色の外洋から高波が次々に寄せて、それらをさらっていくとする勢いだ。木の死、土の死、崩落、壊滅などという言葉が次々に浮かび、禍々しい見てはいけぬものを見てしまったような気がした。不気味に亀裂の走っている舗装面の足元がさらに崩れ落ち、自分もその中に巻き込まれてしまうのではないかと思わず後ずさった。

その夜、吉川さんからメールが入った。ニュースで見たが無事か、という見舞いの言葉の後に、思いがけず、「妻がこの月初めに亡くなりました。葬儀は何とかすませました。生前はいろいろお世話になりました」とあった。

源氏物語の「藤裏葉」の巻。長男夕霧の恋も成就し、ただ一人の愛娘、明石の姫君も入内、自身は准太上天皇まで昇りつめ、四十歳の光源氏はわが世の春を謳歌する。しかし、そこから一転、次の「若菜」の巻で朱雀院の愛娘、女三宮を正妻に迎えるところから、光源氏は内部から崩れていく。甥の柏木と女三宮の密通、柏木の死と追悼、女三宮の出家といった暗鬱なことが続くかげで、光源氏の第一の愛妻、紫の上が弱っていく。ついに「御法」の巻で死。次の「幻」の巻では、絶望した光源氏が一年以上の間自邸に引きこもっているようすが描かれる。

八月の末に、吉川さんは一人で来た。そして別荘に引きこもった。ソフィアも連れていなかった。連絡を受けて私は会いに行き、あらためてお悔やみを述べた。吉川さんを見るからに憔悴していたいしかった。地味なものを着てソファに坐った背中が丸く、白っぽい無精ひげが伸びて一気に十歳も老けこんだようだった。ふだんは料理の得意な吉川さんが食事もろくにとっていないようだったので、私はいったんとって返し、地区の町の小さなスーパーで材料を買いこんで簡単な夕食を作った。部屋の掃除もした。

おだやかだが懸命に耐えているような顔つきの吉川さんに、奥さんの死のことを訊くの

ははばかられた。吉川さんも自分から語ろうとはしなかった。ただ入退院を繰り返した果てに、ということだった。尋常な死ではないのかもしれない。でも、比べるのもおかしい。何を話題にしてよいかわからない私は、つい源氏物語を口にしてしまい、すぐ後悔した。

でも吉川さんは少し興味を示して、

「ああ、「御法」の巻で紫の上が死ぬ。源氏は後悔の念にさいなまれ、しきりに出家を思案するのでしたね。ぼくも出家でもできるといいんだけど。……でも、比べるのもおかしいですが、ぼくたちの関係は全然あんな理想的なものではなかったんですよ。あれは、あなたも知っているように、繊細な女で、若いころから生き難さを常に感じていました。ぼくは、それに寄り添ってやることしかできなかった。いや、結局それも十分できなかった」

言い終りの声が悲痛で、目じりに涙もにじむのがわかって、私は目を伏せた。吉川さんも暮れてきた窓の外に視線を移して、ゆっくりつけ加えた。

「源氏物語はね、人間の幸福にも不幸にも目を向けているでしょ。でもはなやかな幸福よりも、宿命的な不幸の方をより深く探究していると思う。そこがいいですね。人生はそういうものだと思います」

この別荘を手放すかどうか、思案しているところだと聞いたのもその時だった。

あれはきつと、嵐のせいだったのだろうと思う。

九月の末に吉川さんがまた一人で来た。ところが、それまではしばらくは好天が続き、秋の清涼な空と色を深めたおだやかな海の景色だったのに、その日はあいにく台風の来る前日だった。しかも予報は台風が県南を直撃するコースを描いていた。どうして吉川さんはこんな時に、と思った。

台風の備えに、港はあわただしくなった。小さな港しかない隣の集落の船も逃げてくるので、港内は祭りの時のようににぎわっていた。船を岸と、また船と船とを綱でしっかりとつなぎとめる。でも湾のもののかたちを利用し、外洋を隔てて高い防波堤ができています。台風が来ても昔のように船の被害の恐れは少ない。川筋の家屋も、昔は瓦が飛ばないように古い漁網を屋根に掛けたりしたものだが、近ごろでは瓦もめつたにはがれないし、鉄筋の家も増えている。

事務所の仕事を終え、自宅に帰って夕食の支度をすませると、吉川さんの別荘に向かった。雨はまだ降っていないが、空に大きく弧を描いている黒雲の動きが早まっている。海も高いうねりがのたうち、岩場や岸が泡立っている。

招き入れられると、吉川さんは一月前よりは顔色もよさそうだった。テラスのベンチに並んで掛けてお茶をよばれた。台風の話をした。私は、

「今夜あたりからだいぶ吹くそうですから、戸締りをしっかりして、気をつけてください

ね」と、管理人らしいことを口にした。

「このあたりの台風はすごいですよ。大阪あたりの比ではないです。南の海から直接、強いままでぶつかってきますからね」

「ええ。地元の人に対しては不謹慎なようだけど、今回は実はそれを見るのが目的で、急に思い立って来たんですよ。大気の激しいエネルギーが渦巻く中に、わが身を置いてみたんです。荒れ狂う海を見たいんです」

意外なもの言いだったが、聞けばその気持ちは私にもわかる気がした。そんな気持ちは私の中にも昔から居ついている。いや、子供のころの幾たびかしかない、ひどく怖くてしかもドキドキワクワクした嵐の経験が、私の中に嵐を待つ、麻痺にも近いような心理を育てている。現実の被害にはもちろん困るのだが、吹いて吹いてあらゆるものを吹き飛ばして、海山も体も心もすべて更新してくれるような期待感が今も心のどこかにある。

灰色の海から岸を嘔む波の音が這い登ってくる。山がさわぎ、青葉がちぎれ、舞い上がって飛んでいく。低い雲が早く巡っている。私は何かすなおな気持ちになった。

「吉川さん、あれから、どうされていますか？」と訊いた。

「ええ。まあ、何とか落ちつけそうです。講義も始まったので、かえって気が紛れます。体を動かしているほうがいいんです」

一呼吸置いて、私は言った。

「私、とても心配していました。お会いしたかったです」

すると、吉川さんは私を見て、

「いや、ありがとう。私もあなたの顔がとても見たかった。……いや、ずっと前からそうです、この気持ちは」

やや厳しい顔で、ちよつと投げ出すように吉川さんはそう言って、体を前に傾け、庭に視線を戻した。灰がちの長い髪を風が吹き乱した。年がいもなく、私は顔がほてるのを感じた。

夜中、雨まじりの風が強まってきた。家事をすませていったん布団に入ったが、寝つけなかった。谷筋の闇を得意なように風が走って、壁を打ち、樹木を鳴らしていた。海鳴りも不吉に聞こえた。今、吹き荒れる別荘の庭に、吉川さんが濡れながら茫然と突っ立っているような気がした。もしかすると、ともしつと悪い想像も動いた。先月の豪雨の時に見た、不気味な崖の崩落の光景が浮かんだ。私はいてもたってもいられなくなった。父はもう寝てしまったらしい。和樹の部屋からは灯りが漏れているが、私は声もかけず、庭に出て車に乗った。

どう走ったかもよく覚えていない。ただ水浸しの闇のトンネルを、前を見つめて一心にくぐっていく思いだった。門の前で車を降りると風が渦巻いて傘が役立たなかった。インフォンの吉川さんの声が驚いていた。玄関の灯りが、太い雨の筋と吉川さんの細身の体

を映した。門が開かれると、私は何も言えず、びしょ濡れのまま風に押されるように吉川さんの胸に飛びこんだ。

風は夜中をかけて吹きつり、雨もぎざぎざと屋根や板壁を打った。部屋の中においても、空気が薄く軽くなっているのがわかった。ごうごうと海が鳴った。

危ないので夜が明けてから帰るようにと止められたが、私は大丈夫ですと言って夜明け前に別荘を出た。台風を中心はすぐ近くまで来たようで、道の途中で車が持ち上げられて宙に舞い上がるかと恐れた。でもそうなくてもかまわないとも思った。車外は吹き荒れていても、私の心中はおだやかだった。もしそんなふうになったら、もう若くはなく、互いに欠けたようなところのある同士なのだから、二人とも後でひどく寂しくなってしまうのではないかという想像もしていたが、少なくとも私は寂しくはなかった。

どうして私に逢いたかったのか、私をどう見ているのか、とおずおずと訊ねた時、吉川さんは、

「そう、あなたの中の自然に惹かれました。自然、は、野性と言ってもいい。ご本人に自覚はないかもしれないけど、それは生き生きとした、私などにはない、とてもいいものですよ。……さっきは外であなたを見た時、嵐の精が女神になって現れてくれたのかと思います」とささやいた。

女神なんかであるはずはなく私は否定したけれど、少し嬉しかった。ただ、吉川さんの腕の中で何度か声を洩らしたようなのが後で恥ずかしくなった。でもそれもたいいてい、嵐の音が消してくれたはずだろう。

帰ると父がいなかった。もう起き出して港のようすを見に行ったらしい。やがて合羽を濡らして帰ってきてても、知ってか知らずか、私の不在については何も咎めなかった。私は二人分の朝食を整えると、自室に入って寝た。戸外のたいそうなさわぎも気にならず、しばらく泥虫のように眠りこんだ。

この日は漁協も臨時の休みになった。嵐は午前中にいちばん吹き荒れ、もう外出など不可能だった。それが真昼を過ぎると、風向きが変わって急に落ち着いてきた。吉川さんから電話が入って、今夜も会いたいと言う。私も会いたかった。でも道が通れるかどうかわからなかった。二つの集落をつなぐたよりない崖の細道は、落石や倒木などで台風の後には不通になることがよくある。タブレット端末で道路情報を確かめ、念のため、別荘に近い集落に住んでいる朋ちゃんにも電話すると、小さな土砂崩れが二カ所にあって朝から不通になっていたが、もう工事の車が入って夕方には復旧する見込みだという。私は冷やりとした。夜明け前に崩れていたら、私は自宅に戻れなかった。そしたらどうしていただろう。山越えて大きく迂回するもう一つの道はあるが、そのジグザグ道も通れたかどうかわからない。

夕方になると、朝の吹き降りがうそのように空はもう明るみ、海はおだやかさを取り戻

し、水平線の上の雲がきれいな桃色に染まっていた。夕食を済ませ、風呂の仕舞いをする  
と、

「友だちの所に行ってくるけん、ちょっと遅くなる」と父親に告げた。

台風被害を報ずるテレビに顔を向けたままで、

「行くんか。あんまり遅うになるなよ」と父はやや不機嫌そうに言った。

ライトの光を頼りに、ゆっくり車を進めていく。すべてを荒らしていった嵐の余韻のよ  
うに、時おり風が舞って山をさわがせていた。嵐が過ぎ去っていくのを私は惜しんだ。も  
う一度嵐の中で、風や波を感じながら翻弄されたいと願った。

机の前でパソコンを点けて日本語教育サロンに入る。今日の受講者は二人で、一人は中  
年のおばさんだ。以前に一度団体旅行で日本に来たが、日本語を憶えてもつといろいろな  
所を訪問したいのだという。教材を一通り終えてフリートーク。

「長春ではもう初雪が降りましたよ」とそのおばさんが言うと、

「そうなんですか。福州では、皆まだ半袖を着ています」と若い男性が驚く。

「私は日本の四国に住んでいます、今月になってだいぶ冷えてきました。今日はよい天  
気で、海がともきれいでした」と、私は言葉を選びながらゆっくりしゃべる。

終わって洗濯機をまわしながら遅い風呂に入る。寝る前に机の前に坐って源氏物語を開  
いてみる。もう光源氏は死に、物語は次の世代の薫やにおうのみや匂宮の代に替わっている。結局宇  
治の大君は、貴公子薫おおいきみに思われながら女であることを拒否してあえなく死んでいったが、  
その身代わりのような浮舟は二人の貴公子から愛される。優柔不断な薫を尻目に、匂宮は  
強引に浮舟をさらい、浮舟は二晩宮との愛に溺れた。その、前後をすべて忘れたようにし  
て浮舟が味わった歓喜は、私にも少しわかるような気がする。ただ若い浮舟は、直後に深  
い後悔にさいなまれ、薫のプラトニックな愛にもこたえられず、結局宇治川に身投げしよ  
うとするのだが……。

吉川さんの別荘は売りに出され、ぼつぼつ問い合わせもあるようだ。昨日は不動産屋か  
ら頼まれて、一組を案内した。街の不動産屋の店舗からここまでは車で片道七分もかか  
るので、時々そうして客の案内を頼まれる。今度の客は見るだけで買う見込みは少ないと  
聞いていたので、そうなのだろうと思っていたら、派手な装いの勝気そうな奥さんのほう  
が高台からの絶景を気に入って、でっぶりした体型の夫に購入を迫っていた。高松に住む  
実業家らしく、ほかに岡山の高原の方にも別荘を持っているという。居間のソファアやテ  
ラスのベンチなど、ついこの間まで吉川さんが坐っていたところに別の人が坐ると、なん  
だか違和感がとても大きい。

「すぐでなくてもいい、いずれぼくの所に来てくれないか。もちろん和樹君もいっしょ  
に。やがてお父さんにも来ていただいたらいい」というふうに吉川さんはやさしく言って

くれているが、私はたぶん大阪には行かないだろう。

吉川さんと都会で暮すかたちが想像できないわけではない。あるいはそういう生き方を  
選ぶほうが賢明なのかもしれないが、一方でなんだかもうそんなことはいいという気がす  
るのだ。人ごみの中ではなくて、いつも身近にこの大きな海を感じていたい。時代は進  
んで、今はここにいながらでも大阪や東京どころか外国とつながることもちやすすくできる  
んだし。この生まれ育った、母も兄もいっしょに暮した海辺の集落で住みつけ、何とか  
収入を得ながら和樹を高校や大学にやり、父の世話をし、やがて父を見送る、そして自分  
もいずれは老いてゆく、そんなふうには私の人生は子供のころから決まっていたような気が  
する。今はそのつもりはないが、もしかすると気が変わって徹平クンか誰かと再婚するこ  
ともあるかもしれないではないか。

吉川さんにはとても感謝している。おかげで私は何だか、長くとらわれていた屈託から  
ようやく解き放たれて、一つ前に踏み出すことができたような気がしている。

明日は冴子とまた買い物に出かけよう。ハンバーグ屋で定食を食べよう。